

ました。これこそ正に大正生れの宿命ではないだろうか……。

学徒兵として応召、

### 三年間の思い出の記録

富山県 山下嘉平

戦後六十年の節目に当り、往時を回顧し、齢と共に去り行く記憶を呼び起こしつつ、往時の思い出をたどってみた。

昭和十八（一九四三）年十二月一日はいわゆる、学徒徴兵延期停止となり学業半ばにして入営となった。私の生涯において誕生日に次ぐ最も忘れられぬ思い出の日である。

先づ軍歴の概要を記すと、

入隊後二カ月を経て、歩兵第六十九連隊補充隊

（東部第四十八部隊）の一期検閲終了。

昭和十九年五月一日、豊橋第一陸軍予備士官学

校入校。

同年十月十五日、南方軍派遣のため博多港出発。

マライポートデクソンにて現地補充教育。

昭和二十年三月三十一日、同教育終了。スマトラブキナング富第一〇九二三部隊司令部を経て嶽兵団独立混成第二十六旅団通信隊付将校を命ぜられる。

昭和二十年六月十三日、パレンバン出発、昭南島防衛のため転進。

終戦を迎えて、昭和二十年十月二十五日、リオ諸島レンバン島に到着。この無人島にて自活。

昭和二十一年六月十五日、同島出発、七月三日、鹿児島港に上陸後復員完結。

これが私のたどった道筋である。わずか三年足らずの期間だが、特に印象の強かった思い出を記述してみた。

(一) 初年兵から一期検閲まで

大本営発表が徐々に戦局の深刻さを増して来た頃、私達もペンを銃に持ち替えて祖国防衛のため、鬼畜米英に立ち向かう要員ということで応召となった。

入隊当時は教育隊として一般兵とは別扱いで、

よく聞かされた初年兵対古兵の暗いイメージとは全然違い学校の集団教練のようなものであった。しかし訓練は一般兵の倍も三倍も厳しく、その訓練に加えて学習、精神教育、相次ぐ試験などで全く多忙だった。最も苦労したのは食糧で、若い兵隊にとって腹ペコが一番辛い。動作の鈍い者は常に可哀想だ。恥ずかしい話だが班長の残飯や魚の骨等は初年兵にとっては歓迎された御馳走だった。渡河作戦とて、もちろん完全軍装のまま、寒中に神通川をザブンザブンと渡り、臍の辺りまで水が来た時は何ともいえぬ辛い思いであった。

夜間行軍では疲労に加え睡魔避け難く、歩きながらコックリコックリと銃を肩に無意識で隊列に従い行軍した。田舎の細い道を事無く歩いたものだと思議なくらいだ。

(二) 検閲終了、学校へ、またまた厳しい訓練を

甲種幹候生として豊橋第一陸軍予備士官学校第一期生の生活が始まった。

入校初日、一連の行事を終えホットした間もな

く自習室へ集会、種々細部の注意を受け、冥黙の後、各自に筆と硯を渡され、言われる通り半紙に『淡泊、頑張』と書かせられた。

これが在校中の座右の銘となったわけだ。緊張した思いで書き終ると、次に短刀を渡され、自分の名前の下に血判を押せと命ぜられる。初めてのことでもあり度肝を抜かれた思いで一瞬躊躇した。小指を切り刺すことを想像し、誰しもが眼を見合わせた。しばらくシーンとした冷たい空気が漂ったが、結局は小指を少し切り、にじみ出た血で押すことを教えられ先づホットしたが、あの瞬間の気持ちは、今だに背筋に冷たいものを感じずる一幕であった。

入校初日にかような目に逢い、これからが大変だとの思いはお互いに深く印象づけられた。学校の生活、訓練は原隊のそれとは格段の違いを感じた。

第一に感じたことは精神的な教育、いわゆる先に誓った『淡泊、頑張』が終始一貫した教育であ

かす。昼食後またそれを着て午後の演習に出掛けたものだ。厳しい演習の反面、区隊長の温情溢れる好意には敬服した。夜間演習を早目に切り上げ、突然、隊付の兵隊が冷たく冷した西瓜を差し入れに持ってきてくれたのにはびっくりした。みんな大喜びで久方振りの大満足だった。

九月頃だったか、折しも夕刻、全校生徒が舎前に集合、何となく不吉な予感がしていた。西の空に紅い陽が沈む頃、学校長閣下の訓示あり、隊長がサイパンへ転任のよし、戦局ますます不利の時、何とも云えぬ不安と寂しさに身がゾクツとした思いが忘れられぬ。

この頃演習中に、学校本部から乗馬の伝令が駆け付け、急遽演習は中止となり、全員南方軍への転属の命を受けた。

### (三) 南方軍へ転属、輸送船にて

身の回りの整理や軍装の準備や何かと連日忙しさに追い回された。

当時、父が胃潰瘍で手術を受け入院中で、面会

り、善悪の判然とした、とても心の綺麗な日常であった。また同僚の失敗や誤りも（極く一部を除き）自分がやりましたと云う位に、進んで罪を被るような雰囲気の日常生活であった。

日中の訓練の後、自習室で講義を受けた時など、とても眠くて「コックリ」がポツポツと見られたが、終了後「居眠りした奴は一步前へ」の号令には、生徒は皆進んで罰を受け、罪を受けるに躊躇した者はいない。

豊橋の演習場は『高師天伯原』という砂塵の多い丘陵地帯で、夕刻の演習中にはるかかなたの東海道線を蒸気機関車が白煙をなびかせて走り、汽笛の音が何とも云えぬ郷愁を誘う。あの時の涙のにじみ出たことは忘れられぬ。

学校では対空、対瓦斯、対戦車が教育の主眼であった。厳しい訓練の状況は書くまでもなく体力の限界を感じた。

午前中の演習で汗びつしよりのなった夜は、軍服を堅く絞って口を水を含み霧をかけて乾

も出来ず心残りであった。実は後日聞いた話では、安静中の病人が八方手を尽くして、汽車の切符を入手し、医師の止めるも振り切り看護婦に頼み、こっそり逃げ出す段取りをしたらしい。ところが当日朝吐血したので断念したようだ。息子に最後の別れとぜひ面会に来たかったようだった。

最悪の条件を踏み越え、会いに來たい気持ちを一十二分に受け取り、淋しさと嬉しさとが交錯した一時だった。また東京から下宿のおばさんが大変苦勞して面会に來てくれたのが強く印象的だった。

臨時列車は鎧戸を閉めた総行動で、静かに豊橋を後に博多に到着、出港までの約一カ月間は、連日の厳しい生活から一時開放された毎日だった。

昭和十九年十月十三日、博多港出発の「山園丸」（播磨造船所、処女航海、七、〇〇〇トン）で一路南下へ、と思いきや船は北方へと進み、出航間もなくもう敵艦に見付けられたのか我が艦よりボカッ、ドドンと爆雷を投下した。

我々の船団は輸送船十二隻が海防艦五隻、哨戒

艇二隻に護衛され、東シナ海の舟山孤島を南下した。

十月二十五日夜、突如船団の中に敵潜水艦が入った由にて、全員急遽、身支度を整えて甲板上に集結の命下る。

すつきりと澄んだ夜空の月を眺め冥想に耽り、誰もが皆無言の数十分、呆然としていただけだった。

皓々と照らす満月がゆっくりと海に沈む。その瞬間を待っていたごとく突然、発光信号が四方から交錯して発せられ、あたかも打ち上げ花火を見るような状態だった。騒がしくなった途端、左前方の「松本丸」に爆弾が命中、天をも焦がすような火焰が噴騰、爆雷の音のする中に兵士が次々と両手を挙げて海中へ跳び込む様子が手に取るように眼前に写る。いわゆる轟沈と云う瞬時の出来事で、なす術もなく、ただ皆が無事救出されるを願うばかりだった。

次は我々の順番かと不安の中、本艦はしばらく

頭が重く髪が抜けてくる。第二に強い夢も見る。第三に狂った行動をする等々の兆候があれば医務室へ申し出るようにと。ほとんどの者が即入院と云う次第。私は当時指揮班に所属し船室にはほとんどいかなかったのが幸だった。実は船倉に「四エチル鉛」が積んであり揺れている中に少しづつ洩れたらしい。四エチル鉛中毒と云うことらしかった。軍刀を振り回した者もあり、一時大騒ぎも東の間の出来事だった。

#### 四 現地教育隊を経て部隊配属へ

マライポートデクソン教育隊に入ったのは前橋、豊橋第一、仙台、熊本の四予備士官学校第十一幹候の約千五百人であった。

教育の内容は一般術科、学科、徳操について内地での教育を補充のほか、「装典通りではない時機に応じた応用戦闘教育」を目指し、一般歩兵は対戦車、水際上陸、ジャングル戦闘など実戦的訓練、戦訓を生かした教育であった。

昭和二十年三月三十一日、卒業の豊橋関係五百

漂流の末、錨を降ろして停泊、夜も明けた頃、船首は海中に、船尾から曳航された「松本丸」の無残な姿を眼の当りにした。結局は「松本丸」「江原丸」が沈没ということだった。我々の「山園丸」は近くを通った爆雷に舵をやられたらしかった。この間の状況は今もお深く脳裏に焼き付いている。

船は澎湖島へ立ち寄り、海南島を通り、仏印サイゴンのサンジャック港へ夜明けに着いた。遠くで「コケッココー」と大きな声が聞こえた。戦友と共に「この鶏も日本語で鳴いとるなあ」と笑いが出たのも久し振りだった。

暑い地域での船の上でもあり、真水は制限され、洗顔、洗濯、水浴すべてを飯盒一杯の水で賄ねばならず、飲み水のため蒸気管の継目から漏れる水滴を器に採り飲んだこともある。しかし量が多くなって下痢をした奴も随分いた。

船は一路「昭南」へと向かった。上陸した時には大部分の候補生は身体の不調を訴えた。第一に

九十九人の派遣先はビルマを筆頭に仏印、タイ、マライ、ボルネオ、スマトラ等々であり、私は同行五人でスマトラ派遣富第一〇九二三部隊（田邊盛武中将）で「ブキテンギ」に向かった。学校を後に昭南島の「ラツフルス」ホテルに投宿し赴任地へ向かう便を一日待ちにしていた。

当初は厳格な兵営から開放され、久方振りの籠から放された小鳥のごとく嬉々とした心で街へ出たものだが、行くところは当時「火星ビル」に上映されていた映画、高峰秀子主演の「勝利の日まで」と云うのを飽きもせず二回も三回も見に行っただことを覚えている。

帰りにはパサル（中国人の露天食事街）でラーメンを腹いっぱい食べ、帰りに唐辛子をお土産代わりに貰い、その代償は二人で煙草「興亜」一個だけだった。

四月十二日やっと船便があり、小さな船でスマトラパカンバルへと向かうことになった。ここからはトラックに便乗し雄大な山々を縫い、蛇行し

なが赤道を越えた。美しい光景に見とれながら「ブ  
キケンギ」に着いた。

この街は一言で云えばお伽の国とでも云いた  
いところ。深い緑に包まれた小高い丘に、紅い屋  
根、白い壁、そして木立の間を走るのは小さなポ  
ニー（小馬）が可愛い。飾りと鈴をつけ、チリ  
ンチリンと馬車を走らせる姿は殺伐たる戦場とは  
裏腹に、こんなすてきな所がほかにあるかと現実  
を疑った位だった。おまけに当地は気候が内地の  
九く十月頃のように、治安も良く申し分のない快  
適な所だった。

富第一〇九二三部隊司令部の申告を終え、約一  
週間滞在。この間大阪外語の徳大尉の御指導で現  
地スマトラ語の特訓を受けた。少しでも自分のも  
のとなしたいと思い努めて外出し、日常の会話を  
のにしたものだ。過日インドネシアに行く機会が  
あり、五十有余年振りに現地人との会話に大いに  
助けとなり楽しい時間を過ごしたことが思い出さ  
れる。

ほほえましい光景にさえ見えた。

数時間を経て缶にゴム液を入れて戻って来た。  
ゆつくりと一服した後、何かを喋りながら仕事  
にかかるが、何ともものんびりやで呆れかえった次  
第。そんな事で日も暮れ、とうとう予定時刻に行  
けず一泊を余儀なくされた。

ラハトの独混第二十六旅団司令部に到着、尼子  
熊一郎閣下からは慰労の言葉を賜った。その温顔  
と立派な体格からにじみ出る優しいお言葉に、長  
い旅の疲れも打つ飛んだ感じで、恐れ入ったこと  
を思い出す。

私の赴任先の旅団通信隊は隊長工藤大尉、無線  
隊長三沢中尉、有線隊長竹田少尉と小生の四将校  
以下約八十人の隊であった。

歩兵の教育を受け、内地からずっと対空、対瓦  
斯、対戦車などを重点に訓練を受けた私には初め  
ての通信隊、しかも無線小隊長を命ぜられ全く面  
食らった。早速、先任軍曹を師としモールス信号  
を習い始めた。とにかく兵隊の前でも恥をかかぬ

私の赴任地ラハト（パレンバンの西北方）にあ  
った独混第二十六旅団通信隊（嶽兵団旅団長尼子  
熊一郎少将）へと向かった。オンボロバスで南下  
し、炎天下でもちろん道路も舗装してないガタガ  
タ道を一路ラハトへと向かったが、途中何回かの  
川を渡ったこと、これがまた変わった渡舟だった。  
向かう岸までワイヤーが張っており、いったん川  
を下るごとく進み、中央部からは今度は対岸の上  
流に向いて進む。「く」の字航行であった。流れが  
早いので真直に行けぬらしい。

やゝしばらくバスは走り、ここでペチキ（パン  
ク）と云う破目に逢った。ドライバーは修理に取  
り掛ったが、これがまたスペアタイヤもなく、用  
意した缶詰の空き缶を持って来て「ここでしばら  
く待つて下さい」と、その缶を持って約二キロも  
離れたゴム林へ行き、樹に傷をつけて液を採りに  
行くと云う段取りだ。全くのん気と云うか、憤慨  
したが考えて見ればセカセカした人間社会よりも  
よほど悠長で自然と共にのんびり生きる、むしろ

程度に一生懸命頑張った。

就寝中でも、合調音（イ・ロー・ハ・ハ・  
・・等）が耳について眠れぬ毎日であった。通信  
隊は少ない人数で、しかも数人ずつ各離島へも出  
向しているため、本隊残留人員はごく少ないのが  
通常である。司令部への用事も度々で、尼子司令  
官にも何かと可愛がって頂いた。

(五) 「マ号作戦」で昭南防衛隊として転進  
そうこうしているうちに六月十三日「マ号作戦」  
とやらで山兵団を編成（嶽兵団の上の山をとった  
らしい）昭南防衛隊となりパレンバン港を出るこ  
とになった。この時の忘れられぬ記憶がある。

私は通信隊長の命令で、小隊を率い「滞貨をラ  
ハト駅より指定の貨車二両に積み込み出発に備え  
よ」とのこと。命に従い滞貨を運ぶ作業中、鉄道  
司令官が来られ「お前の隊には、この貨車の配当  
が無いから、滞貨を直ちに降ろせ」といわれ、種々  
掛け合ったが全く聞き入れられず。旅団長の命の  
下でなぜ様々な違った行動になるのか、自分は「隊

長の命のままに行動します」と頑として抵抗して食いがつた。何度も何度も交渉の末、とうとう承認させたことがあった。

その後、司令部にてお偉方のお別れ会の時、その司令官が(平常は横柄・傲慢な人を通じており、誰しもが一目置いていたようだ)私の隊長に「お前のところの新参見習士官に今日はひどく嘔みつかれたよ。彼の押しには俺もとうとう引き下がった、なかなかの奴だ、気を付けろよ」と大笑いだったそうだ。

その後、工藤大尉がすっかりご機嫌で「見習士官、お前のやることは俺が全部責任をとる。何でもやれ。好きなことをやれ心配するな」と励まされたのがとても嬉しかった思い出がある。

尼子司令官との別れの挨拶に行った折には、大変優しい慰労のお言葉に加え、とても珍しい内地の緑茶とようかんを頂き、帰りには御自分の衣装や靴下などいろいろと下さったことに感激した。

約二カ月の短い期間のスマトラであったが、本

る調査された上、容疑が晴れ、一般の白キャンプに戻されたわけだ。この検閲所を通り、十月二十五日、リオ諸島レンバン島へと移動になった。

ジャングルを伐り開き、道を作り、船着場を作り、住家を建てたり、とても忙しい数日を経てようやく開墾した土地で自活を開始することになった。当時は捕虜の身として刃物の所持は極度に制限され、必要な道具も試行錯誤の末いろいろなものを作った。軍隊と云うところはまた便利なところで、鍛冶屋も大工も僧侶もと云うように何でもそろうところであり、開墾用に使う鎌を包丁にした滞貨の麻袋を糸にして網にしたり、木を切って下駄を作ったり、いろんなことを考えて生活用具を作った。

空腹を耐え、タピオカ諸を植えたが、これが大きくになると野豚(バビー)や野猿が取りに来て、とても我々の口に入るまでには至らなかった。猿は捕り難いが落とし穴を掘り野豚を捕ることにした。偽装は奴等に見破られ、代わりに兵隊さんが落ち

当にたくさんのことを学び、得難い経験もさせてもらったと思っている。

六月十三日、昭南港に到着、早速チャンギー地区に入った。隊は陣地構築や各隊の通信連絡業務に携わったが、私は南方軍第三通信隊に赴き、毎日「モールス」の練習や各隊との連続折衝に当たった。

#### (六) 終戦、検問、島流、抑留、自活

昭和二十年八月十五日、将校集会所に集合を命ぜられ、神妙な面持ちで玉音放送を聞いたが、ザーザーと物凄い雑音の間に辛うじて聞こえた終戦の報に、体の力がスーッと抜ける気がした。大変長かった戦争もようやく終りを迎え、特に虚脱状態の数が続いた。

一転して捕虜の身となった我々は転々と移動し、揚げ句の果、クルアンに集結、ここで全員ふるいにかけられ「白」「灰」「黒」のキャンプに入れられた。戦犯容疑の振り分けである。私は通信隊所属将校の関係で灰色キャンプに入れられ、いろいろ

ると云う破目になり大笑いだった。

極度の食糧不足で食べられるものは何でも口にした。ゴムの木の芽や葉の軟らかいところ、パパイアの木の根や野草など、馬が喰うから大丈夫と訳の分からぬ草も随分食べた。蛇や蜥蜴、蝸牛など捕ったら御馳走だ。海藻など毎日の食膳へ、しかし当時は物凄くほうれん草等の野菜が食べたくてよく話題になった。このとき実は極度の便秘になり、一週間も十日過ぎても通じがなく、長時間頑張って油汗を流してようやく少し排便、かすばかり溜って流れが悪い、手伝ってやるために必ず割箸の様なものを持って行ったことも忘れられない。青森出身の子春と云う上等兵が「自分は二時間と十五分頑張りました」と笑って云った言葉が今でも耳に残っている。

栄養不足で体力も耐えられぬ数人の兵を無念の涙で送った日もある。当時の我々の脈拍は二十五〜三十位であり三十五以上の者は医務室へ来いという事だった。

歩行はフワフワと浮いたような気持ちで、少し荷物を背負って、重りをつけた方が歩き易いので、みんな必ず杖をついていた。また暑い場所でありながらみんな集まって焚火をし、故郷の食べ物の話をする毎日だった。

丘に上がってはるか海を眺め、遠い祖国のこと等どんな思いで見つめていたことか。たまたま見た「リバイ船（内地への輸送船）」が日本へ向かう姿を見て、戦友と共に涙が後を断たなかった。

製塩班が苦勞して作った塩を缶に入れ、大切にし、いつか帰る故郷へのお土産にと荷物の中へソーツとしまい込ませたものだった。

私のたどった人生のほんの一部でもが回顧録への参加ともなれば幸いである。最後になつたがこんな戦争により善良な多くの人達を不幸のどん底へ落すようなことは絶対に起こしてはならぬことを声を大にして訴えたい。そしてまた不幸にして戦没した同期生諸君の英霊に合掌を捧げたい。

## 【解 設】

体験記執筆者は、学徒徴兵延期停止により歩兵第六十九連隊補充隊（東部第四十八部隊）入隊、一期検閲後の昭和十九年五月一日、豊橋第一陸軍予備士官学校入校。十月十五日、南方軍派遣のため博多港出発。マライポート、デクソンにて現地補充教育。昭和二十年三月三十一日、同教育終了後、スマトラブリキナングの富第一〇九二三部隊司令部を経て嶽兵团・独立混成第二十六旅団通信隊付将校を命ぜられる。

昭和二十年六月十三日、パレンバン出発、昭南島防衛に転進。終戦により、十月二十五日、リオ諸島レンバン島にて自活生活。昭和二十一年六月十五日、同島出発、七月三日、鹿児島港に上陸後復員完結す。

体験記執筆者の最後に所属した独立混成第二十六旅団は、南方軍―第七方面軍の隷下であり、スマトラ派遣嶽第一〇九一六部隊として、南部スマトラ防衛の第十六独立守備隊を基幹に編成された。

その任務を継承して第三十五軍に編入され、司令部をラハトに置いていた。

旅団砲兵隊は迫撃第十一大隊第三中隊を基幹に迫撃二個中隊で満州の東寧から移動した。

初代旅団長は河田槌太郎、昭和十九年七月六日より終戦までは尼子熊一郎であった。

昭和十九年一月～六月には、南部スマトラのバチアラムにおいて防衛に任じた。また従来パレンバン防衛隊が防空と同地周辺の防衛にも従事していたが、昭和十九年一月に第九飛行師団に編合となり、旅団が代わってこれらの任務を担当した。

昭和二十年五月、昭南地区の防衛強化のため旅団の転用が下命され、第七方面軍の直轄となつて昭南防衛軍へ移動、チャンギー地区の防衛を担当した。

当時、第七方面軍は南方軍の企図に基づいてシンガポール（昭南島）を中核とするマレー、スマトラ、ジャワ、ボルネオの各要城を確保すべき方針の下、各軍の部署を定めている。

第七方面軍はシンガポール周辺強化のため、五月初旬にアンダマン、ニコバル諸島より歩兵三個大隊基幹の抽出を計画したが、この企画は途中で挫折し、このためか五月末にシンガポール直接の防衛強化を計るため、スマトラに在った独立混成第二十六旅団の転用を計画したという。

これによりシンガポール島及びその直接外郭たるジョホール州は、方面軍司令官直接指揮の下に第四十六師団、独立混成第二十六旅団、昭南防衛隊、その他航空、海軍部隊を以て守備を強化しつつあった。

終戦の九月五日英軍はシンガポールに上陸した。